

「令和の日本型学校教育」の構築を目指した校内研修の在り方の追究
「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するための教師の学びを通して

静岡県田方郡函南町立桑村小学校
校長 渡邊 衛

1. はじめに

本校は、創立 150 周年を迎えた全校児童数 68 名の歴史ある小さな学校である。山の高台に校舎があり、その周りには木々や畑がたくさんある。そこでは、四季折々に五感を通して季節を感じることができる。中でも春の景観がすばらしく、学校の敷地内にはたくさんの桜の樹が植えられており、春には桜の花々が一面に咲き誇り、私たちの目を楽しませてくれる。また、遠くに目をやると新緑の山々が生命の息吹を感じさせてくれる。風によって運ばれてくる花々の香しい甘い香りは、小鳥や昆虫たちを優しく誘い、小鳥たちは元気なさえずりで春の訪れを喜ぶ。

本校の児童は、五感を働かせて感性を豊かにすることのできる学習環境にあり、そうした「強み」を働かせた豊かな体験活動を行っている。

さて、そうした子供たちが活躍する未来の社会においては、変化が激しく予測困難な時代であることが予想され、どのような資質・能力を育成していったらよいのかが問われている。

このような状況の中、平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領には、子供の育成すべき資質・能力として、「一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」と示された。

また、令和 4 年 5 月の教育公務員特例法の一部改正を受け、静岡県教育委員会は「令和 5 年度静岡県教員研修計画」を策定し、求める教師像を「時代や環境の変化に応じた知識・技能及び指導方法を身に付け、児童生徒一人一人の学びを最大限に引き出し、その主体的な学びを支援する伴走者として、児童生徒を導く資質・能力を身に付けることが求められる」とした。

今回、学習指導要領の改訂により育成すべき資質・能力を明らかにし、「どのように学ぶのか」といった子供主体の学びの在り方が示されたことは、新たな教育改革の転換点となったのではないかと考える。

そこで、本校では、自校の子供たちに育成すべき資質・能力を検討し、その育成にあたり、校内研修の在り方を「令和の日本型学校教育」の視点を柱に、教師自ら自分ごととして学ぶ研修体制を追究することにした。

2. 研究実践

(1) 育成すべき資質・能力の設定

令和 4 年に、全職員で本校教育活動に関する SWOT 分析を実施した。

本校の内的環境の「強み」と「弱み」についての主な意見は下記の通りである。

①内的環境における「強み」

○子供たちは素直であいさつがよくできる。異学交流が実施され、優しい心情が育まれている。特に 6 年生児童が優しく低学年児童と関わり、それが温かな雰囲気を作り出している。教師は 1 クラス当たりの児童数が少ないので、一人一人の児童を丁寧に指導することができる。

○小規模校ならではの子供たちに対し、行き届いた指導ができることが強み。職員室でも、全ての職員が子供の現状を把握し、問題をみんなで解決していこうとする雰囲気がある。

○クラス替えがないので、子供たちはお互いのことを理解し合って生活している。職員も含めアットホームな温かなところが強み。一人一人を丁寧にみるので個人のパースに合わせた指導がしやすい。

②内的環境における「弱み」

○児童数が少なく、友達関係が固定されている。語彙力が乏しいため、自分の考えを友達に上手に伝えるこ

とができない。他者が気を利かせて代わりにやってしまうことがある。教師が全員に分かりやすく教え込もうとする指導が見られる。

○子供は大人が丁寧に関わるので、自分から学ぼうとする意欲に欠ける。また、やってもらって当たり前とする風潮が感じられる。

こうした「強み」と「弱み」の分析と考察を通して、本校児童に育成すべき資質・能力を下記のように設定した。

【令和5年度 育成すべき資質・能力】

- ① 豊かな感性を働かせる力
- ② 他者の意見を聴き、自分の思いを話す力
- ③ 自分の思いを大切に、深く考える力
- ④ 自分と相手を大切に、より良く行動する力
- ⑤ めあてに向けて取り組み続ける力

(2) 「令和の日本型学校教育」を目指した校内研修

① 学校長による研修講話

令和4年4月、学校長は全職員を対象に「資質・能力の育成を目指す『主体的・対話的で深い学び』を核とする桑村小学校の授業づくり」をテーマに講話を行った。

本校がこれまで大切にしてきた「感動ある学びを子供と共に」の理念を大切に、教師は常に子供の実態を把握し、育成すべき資質・能力の伸長を図っていくことを確認した。そして、授業改善の視点として、児童の資質・能力がどのように育成されているのかの視点から検証することが大切なことから、「学習過程可視化法」を活用し、子供の学びの姿から授業研究を進めていくことが提案された。

また、これからの時代に求められる資質・能力の育成を図る授業改善は、教員が個々に行うのではなく、学校組織として取り組むことが必要である。そこで、学校長は、「カリキュラム・マネジメント」の視点から、単に本時の授業から見える児童の学び方や教員の指導方法にとどまるのではなく、単元(題材)構想を核に組織的、計画的に授業づくりを行う重要性について語った。

そして、学校の主役である子供の置かれた学習環境を生かし、子供がこれから生活していく未来の社会を想像したとき、どのような資質・能力を育成していかなければならないのかを深く考え、これからの教育活

動の改善や組織運営の改善に努めていくことが求められることについても研修した。

研修に参加した教職員の声の一部より

○子供は自分の言葉で考えをまとめることが困難な実態にある。だから、意味を理解するところまで達することができないのではないかと反省する。カリキュラム・マネジメントの視点を大切に、組織で取り組むことの必要性を強く感じた。

言語活動を柱とした豊かな表現を柱とする「深い学び」の充実とカリキュラム・マネジメントの視点を大切に単元(題材)構想の重要性が職員の振り返りから感じる事ができた。

子供たちは「深い学び」を通して、新たな問いを生み出していく。こうした学びを積み重ねていくことで学びの楽しさを実感し、「もっと知りたいこと」や「もっとやってみたいこと」等が生まれてくる。これこそが自分ごとの学びである。こうした学びを実現させていくためには従来行われてきた教師主導の授業であってはならない。ここに、「令和の日本型学校教育」の構築を目指した校内研修の在り方が必要となるのである。

本校では、学習指導要領の改訂を機に、研修テーマを「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」と設定し、仮説を以下のように設定し授業研究を柱によりよい授業の在り方を追求してきた。

- ①他教科とのつながりや、発達段階をふまえた、資質・能力のつながりを意識し、単元目標や本時の目標を設定することで、「深い学び」を意識した指導ができるであろう。
- ②どのような「主体的な学び」、「対話的な学び」を本単元(もしくは本時)に取り入れたのかを明示して、それらが各教科における「見方・考え方」とどのようなつながりがあるかを明らかにすることで、授業改善につながるであろう。

この研修実践後の課題として、「『深い学び』の姿について、具体的な子供の姿をイメージすることが難しかった。また、イメージできないことから、そこに

向かう手立ての有効性などについても検討が行いにくかった。」と意見が挙げられた。

学習指導要領の改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組もうとした方向性は間違っていない。しかし、残念なのは課題にあるように教師の指導方法は示されているが、肝心の子供の学びの姿が見えないところである。

そこで、令和4年度に取り組んだ研修方法が「学習過程可視化法」である。この方法は、学習過程の中で、授業の流れ（時間経過を横軸）と子供の学びの深まり（資質・能力の育成を縦軸）の二つの軸をもとに、子供の発話や行動、表情を観察し、思考の流れを見える化するものである。この研修方法を採用することで、子供の表れや変容等を手掛かりに、どのようにして「主体的・対話的で深い学び」が形成され、どの場面で授業者がねらった資質・能力が育成されたのかを子供の姿から具体的に検証することが可能となった。

(3) 校内研修の実践

①第4学年図画工作科の授業実践

令和4年6月、第4学年1組の学級で図画工作科「段ボールの大へんしん～アイデアあふれる段ボールボックスをつくろう～」の研究授業を行った。

本校の校内研修では事前研修を大切にす。特に大切にしているのが題材構想である。授業者が育成すべき資質・能力をいかに捉え、題材をデザインしているのかを一人一人が理解し、自分ならどのようにデザインするのかを具体的に構想するのである。

校内研修では、学習材と子供の出会いの在り方が協議の中心となり、次のような意見交換をする教師の姿が見られた。

- A：段ボールとの出会いを感動的にすると子供たちの創作意欲がかき立てられるのではないかな。
B：段ボールはどこにでもあるよね。
C：見た感じだけでは違いがわからないよね。
D：そこだよ。触るんだよ。触って紙の質感の違いに気付くんだよ。そこから子供たちが自分に必要な段ボールを見出し、段ボールボックスづくりのイメージを一人一人が持つんだよ。
E：そこって大切だよ。本校では、感性を育むことを目指しているのだから。

題材構想を皆でデザインする研修は、一人一人の学

びの姿を大切に、長いスパンで授業を構想し、資質・能力を育成することが大切であるということ職員間で共有できたことに大きな成果があった。また、学習過程可視化法を活用した研修では、子供の思考過程を生かした学びを形成していくことの重要性を理解することができた。

②第3学年算数科の授業実践

令和4年12月、第3学年1組の学級で算数科「三角形の性質やかき方を調べよう」の研究授業を行った。この単元では、ICTの活用をいかに単元構想に組み込み授業をデザインするのかを協議した。

主な意見は、次の通りである。

- F：これまでの図形を黒板に提示する方法で、一人一人に応じた個別的な学びはできるのかな。
G：一人一人の解決方法は違うものね。それをどう解決していくのが大切だね。
H：タブレット端末で写真を撮ってまとめたり、共有ノートを活用してグループで話し合ったりしてはどうか。
I：そうだね。ICTを活用することで一人一人の学びを生かすことができそうだね。

授業の単元構想をデザインするときに、ICTの活用ありきではなく、子供の学びの姿からICTが有効に働くことをイメージすることができたことが有効であった。

(4) 令和5年度の研修について

令和5年4月、学校長は新たな職員を含めた全職員を対象に「資質・能力の育成を目指す『主体的・対話的で深い学び』の授業改善を柱とする校内研修の進め方」をテーマに講話を行った。

この講話では、本校児童に育成すべき資質・能力の設定とその理由について説明するところから始めた。そして、学校教育目標である「夢に向かい 感性を育む 桑っ子」の具現化について、授業を柱に全ての教育活動で迫ることを確認した。

また、校内研修で期待する教師の学びの姿についても言及した。

- ①個々の教員の資質・能力の向上
- ・課題解決に向けた、自律的、主体的な取組
 - ・教師自らが自分の成長を実感

②教員の協働的な学びの推進

- ・同僚性を高める

③学校の組織力の向上

- ・カリキュラム・マネジメントの確立と推進

令和3年1月26日の中央教育審議会には、教職員の姿として、「環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている」や「子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている」、そして「子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている」を求め、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に迫ることの重要性を示し、私たち教職員も児童と同じように学び続ける姿勢が大切であることを求めた。

そこで、学校長は、職員に自分ごととして研修を捉えることをねらい、これまでの「仮説検証型研修」から「課題解決型研修」への研修スタイルへの転換を提案した。

過去の校内研修では、年度の始めに職員間で理想の授業の姿や仮説を設定し、その実現のために幾つかの方策を講じて、それを検証するといったスタイルがとられてきた。しかし、この研修スタイルであると普段の授業改善となかなか結び付かないのではないかという課題が生じた。そこで、教職員一人一人が校内で行う研修を子供の学びと同じように自分ごととして捉えることを期待して「課題解決型研修」へと転換することにしたのである。

教師一人一人は、目の前にいる子供たちと学びを創っていく。その中で、その教室にいる子供たちの学びの姿から様々な課題に気付くことであろう。そして、日々の授業実践を通して、子供と共によりよい授業づくりを行っていくことで、不断の授業改善へとつなげていくのである。

3. 成果と課題

令和4年度の研修を振り返ったとき、次のような意見が職員から挙げられた。

これからの社会を生きる子供たちに必要な資質・能力とはどういう力なのかを考え、授業づくりを行うことが必要であると思う。「自分ごとの学び」はまさにそれで、他者に任せるのではなく、自分で考え、行動する力を育成することが必要ではないか。図画工作科

は、自分で考え行動することがしやすい。しかし、算数科は難しい。その違いは何か？それは、「正解」を求めるかどうかにあるのではないか。これからは「正解」を求めるのではなく、自分の思いや考えを大切に、課題に立ち向かっていくことが必要であると考え。まず自分で考える。見通しをもって問題の解決にあたる。困ったら他者に相談するなど解決方法を工夫する。そこに協働の学びがあったらよい。そして、最後に振り返ることで自分の成長を自覚する。これからの教師は、いかに分かりやすく教えるという教師中心の考え方から転換し、子供に寄り添い子供一人一人の資質・能力の伸長を図ることが大切なこととなる。

今後も、学習指導要領と「令和の日本型教育の構築を目指して」のねらいをしっかりと押さえつつ、桑村小学校の『強み』を働かせた授業の在り方を研修していくことも必要ではないだろうか。

昨年度の校内研修を振り返り、これからの校内研修において「令和の日本型学校教育」の構築を目指すことに気付いたことは大きな価値がある。

これまで実践してきた「仮説検証型研修」は一斉指導の授業形態では大きな力を発揮した。しかし、これからの授業は、子供一人一人が最適な学習方法を自ら選択し、実行していくのである。そこで、私たち教師も「課題解決型研修」へと大きく転換することが必要であると考え。

子供たちが行う「個別最適な学び」と「協働的な学び」を私たち自身の校内研修に組み込む意義は大きく、それを職員間で共有し、令和5年度の校内研修体制に組み込むことができたことは大きな成果といえる。

4. おわりに

社会が急激に変化する中、自ら考え、行動していくことが求められる。それは未来を生きる子供とともに彼らの資質・能力を育成する私たち教師自身にも必要なことである。

桑村小学校では、本校の強みを働かせた持続可能な新しい校内研修のスタイルを構築することができた。今後も新しい研修体制の中、教職員が自分ごととして校内研修に課題をもって参画し、不断の授業改善に取り組む中、子供たち一人一人の学びを最大限に引き出し、彼らの資質・能力の育成に努めていくことを推進したいと考える。